
私立青陵学園新聞部

金澤 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立青陵学園新聞部

【Nコード】

N3516J

【作者名】

金澤 樹

【あらすじ】

私立青陵学園高等部、小高い丘の上に建ち、周囲を桜の木に囲まれた美しい学園に僕こと安藤龍二は通っている。

幼馴染の山中隼人のお姉さん、山中美春ことみーちゃんに強制加入させられた新聞部。

今日も僕はスクープ探して東へ西へ。

部活動（不当な扱い）にもなれ始めたGW明けの時期にこれまた幼馴染の夏樹まで部活に入部しちゃって……。

王道学園ドタバタラブコメディー
超不定期連載

「先生！事件がないなら事件を起こせば良いんですよ！」

変な趣味なのかも知れないけど、僕は蛇花火が好きなんです。

シユワワーッと赤色に変化して、なんともいえないグロテスクな動きをしながら灰色の炭に変化していく様子がたまらない。

というか蛇花火を考えた人が好きですね。

だってあれってどう見ても気持ち悪いじゃないですか。ヒット商品になるとは到底思えない。実際あんなもん別に好きじゃないって人は多いと思うんですけど、でも消えていってしまう事もなく未だに存在するでしょう？意外にファンが多いんじゃないかな。

なにを考えてそんなもん作ったのかについて2時間くらいの特番を組んだら絶対おもしろいだろうと思って、テレビ局に企画案を送ったんだけど未だに返信が来ないんです。

きつと余程大規模なプロジェクトになってしまっていて、計画の立案が遅れているに違いない、絶対そうだと今でも信じています。

世の中には結構、本当になにを考えてそんなもん作ったのかいまいち理解し辛いものや、何でこんなもんが存在するのかあやふやなものって沢山ある様な気がする。

才能に関してだってそうですよ。

例えば米粒に絵とか文字を書く人がいますよね。

正直意味が分からない、普通に紙に描けよと思うときもありますけど、残念ながらそういうの僕は大好きだ。

テレビでも特集されるくらいだし、世間にも好きな人は多いんじゃないですかね。

あー、つまり何が言いたいかって言うんですね、一見無価値、もしくはマイナスに見えるようなものでも、突き詰めていけば価値が見出せるんじゃないかって僕は思うわけです。

絵が描かれた米自体に価値は無かったって、そこに絵を描く人の技巧

や思考、努力にはきつと価値があるはずでしょう？

先生方がよくおっしゃる結果よりも過程が大事なんだっていうあれですよ。

もー大賛成っ。その通りっ。世の中には結果が出なけりや無意味だっって言っ人もいますけど、ありゃーひねくれた物の見方ですよね。試合に勝たなければ苦しい練習に耐えてきた意味がありませんか？違いますよね。

その練習で鍛えてきたガッツや身体能力はその人から失われるものではありませんし、人間は敗北から学ぶ事だって多いじゃないですか。

甲子園で優勝できなかったからといって高校三年間の青春は0になっってしまうすか？

違っうでしょう？その人が大人になり、息子や娘に夢を託す事だってできるわけです。

泣ける話じゃないですか。親子のスポーツ物語。自分では果たしきれなかった夢を子どもが叶えてくれた瞬間の、厳しかった親父の一筋の涙。息せき切っってスタンドから駆け下りてくる親父。もうその親父は甲子園の特番でも特集されてるわけです。あの怪物投手を育てた親子の物語としてね。

そうして息子のところへ駆けつけ抱きしめてやりたいわけですが、親父はマスコミに囲まれてしまっうわけです。『お父さん！今の気持ちを一言！』『お父さん！全国のファンへむけて何かメッセージを！』と。親父は焦ります。こんな所で時間を潰すのではなく、一秒でも早く息子の所へいっって、この感動を真っ先に息子へ伝えてやりたいと。

涙が止まらないわけです。親父は。喜びの涙だけではなく、こんな所で足を止めてしまっう、世間体をきにする自分の老いが悔しくて、真っ青な空の下躍動した息子の若さが羨ましくもあるわけです。

親父は本当に不器用なんです。

グスッ……。

はやる気持ち、それを押さえつける自分の今までの人生。割れるようなスタンドの歓声が親父の心をはやらせます。

だから、親父は自分の精一杯で答えるんですよ、マスコミに。

「あの子が生まれてきた事の次に、嬉しく思います。全国の応援してくれた皆様に、息子に変わって御礼を申し上げます、本当に、・・・本当にありがとうございます。・・・ありがとうございますっ！」

ヒクッ・・・。

・・・そう言った次の瞬間、親父の背中から声が掛かるわけです。

「親父・・・。」親父が振り返るとそこには・・・。

優勝投手の息子です。ナインとの喜びもそこそこに、きっと自分のもとへ走ってきてくれるであろう親父を探しにきたわけですね。

ズズッ・・・。

辛く、苦しい日々だった。

思い返せば親父に褒められた事などなく、いつも叱咤されてばかりだった。

恨んだ事もある、何度反抗して、投げる事をやめようかと思ったこともある。

親父の無念を、俺に擦り付けるなよ！と言葉を叩き付けた日もあった。

それでもあの日、親父を初めて殴ったあの日。

夜中に一人で居間のちゃぶ台に座って、黙々と自分のグローブの手入れをしている親父の後ろ姿を見たときから、息子は一切の文句を言わなくなっていたんです。

ウウウッ・・・。

リトルリーグの頃から、仕事を休んでまで親父は息子の試合の観戦を欠かした事は無かった。気付けば、いつもグローブやバットはピカピカに磨き上げられていた。

毎日の仕事の後に、親父は黙って息子の練習の為にボールのトスを続けるんです。

クリスマスのプレゼントはいつも野球の道具。
初めて親父とキャッチボールをした時の喜び。

そういった思い出が一気に息子の中に駆け巡るわけです。

そして、息子は、涙を目一杯に為ながら、バツと頭を下げて一言叫ぶんですよ。

「ありがとうございましたっ！！！！」と。

そう・・・、まるで・・・、試合終了の時の挨拶のようにな・・・。

「・・・。」

「・・・グスッ。」

部屋の中に静寂が満ちる。

向かい合う二人の男がそこにいた。

僕と、葛西の二人だ。

安物のパイプ椅子が時折ギシツときしむ音と、丸い掛け時計が刻むカチツカチツという音だけが空間を支配していた。

窓から差し込む光は鮮やかな朱色に染まり、夕暮れ時の到来を告げている。

春とは言ってもまだまだ夜は冷え込むこの季節、徐々に下がってきた室温と、一組の感動甲子園ストーリーにむせび泣く僕は、体の震えを抑える事が出来ずにいた。

「あー・・・、その、なんだ。」

葛西の野郎が困ったように頭をかきながら言葉を漏らす。

「・・・グスッ。」

嗚咽をとめられない僕。

「何故・・・こんな話になった・・・。」

僕にもわかりません。

「・・・クスッ。」

「・・・濁点が無いだけでセリフっていうのは印象が随分と変わるもんだな安藤。」

「・・・グズッ。」

「・・・トータルで濁点の数があつてりや良いってもんでもないと思うぞ、先生は。」

「・・・クスッ。」

「それは先生に向かって言っているのかね安藤君？」

「ただの嗚咽です。」

「そうか。」

再び沈黙。

きつと葛西も僕の話した物語に心の中で涙を洪水のように流しているに違いない。

実際に涙の渦に巻き込まれて溺れてしまったらこの説教も早く終わって助かるのに。

いや、でもその場合僕も葛西の涙の海のなかで溺れることになるのか。

40を超えたおっさんの涙で溺れ死ぬなど、僕の理想とする大往生とは程遠い。

汚らわしいっ！

「先生・・・泣かないで下さいね。一生！」

「先生は君の脈絡の無い会話に心底驚いて呆然としているだけです。というか最後の一言に君の先生に対する感情の大半が込められているような気がしてなりません。」

「それは勘ぐりすぎというものです。葛西先生大好き！」

「花も恥らう高校生に告白されるのは先生もドッキドキの急展開ですが、君の死んだ魚のような目をみた瞬間に現実の波に先生押し流されてしまいました。というか男×男の趣味は先生にはありません。ご遠慮願います。」

「そうですね、男は引き際が肝心だと死んだじっちゃんが申してお

りました。涙を吞んでこの身を引くと致しましょう。でわ、これにて失敬、あーらよつとくりやあつ。」

「待てい安藤。勢いに任せて逃げようとするんじゃない。」

「逃げるなんて失敬な。先生は僕を負け犬か何かだと勘違いしてやしませんか？」

「負け犬ならまだ賤がしやすいんだけどな、安藤の場合はさかつて発情期の犬だな。」

「ひどいつ！人権侵害だ！」

「おやすまん、先生つい本音が・・・。」

「教頭先生にいつけてやる！」

「教頭先生が仰ってました。」

「だから大人って嫌いだ！」

まあそれは置いといて、と葛西が咳払いをひとつ。

僕としては徹底的に追求と糾弾を行い、現状を打破する原動力のひとつとして今の話題を掘り下げて録音し、マスコミにリークする事を所望したのだが残念ながらボイスレコーダーは鞆のどこを探しても出てこなかった。ので諦めて息を呑む演技に全力投球する。

「山中と共に深夜の校舎に忍び込み、春だというのにロケット花火計80発、ネズミ花火計30個を着火しまくった拳句、屋上で打ち上げ花火まで40発ほど打ち上げた事に対する追求を改めて再開しようじゃないか。」

「あらやだ青筋。先生。額にミミズが入ってますよ？」

ドオオオオオン！と激しい音と共に目の前の机に叩きつけられた竹刀に、僕は今日の帰宅はお天道様には見届けてもらえまいと胸中むせび泣いた。

「先生！校内暴力ってどこに電話すれば解決して貰えますか！？」

私立青陵学園高等部、小高い丘の上にたち、その周囲を桜の木に囲まれた美しい校舎を誇りとして文武両道をモットーに掲げる僕の母校だ。

平和、といったら聞こえが良いけれど、まあようするに特に面白味が無いと言ってしまうえばそれまでかもしれないこの母校は、一応地域の進学校という事になっているらしい。

鬼のような両親の叱咤激励に半ば無理やり、といった感じで青陵学園に押し込まれた僕は、

正直落ちぶれていく自分の未来が目映るようで日々戦々恐々として震え、毎晩枕を涙でぬらしている。のは、まあ冗談だけど、正直今まで地域の中学校ではなんとか上位をキープしていた成績が霞んでしまうほどの周りのレベルの高さに、辟易しているのは事実だ。

僕と共に青陵学園へと入学した山中隼人は幼稚園の頃に僕が引越して来て依頼の幼馴染であり、親友。

これがまた腹立つほどのイケメンで、正直いつかはグーで顔を陥没させてやろうと思っているんだけど、空手の段位もちのヤツに死角は無い。早く原付の免許でもとりたいもんだ、金属の塊にはさすがに適うまい。

そこで、まあ、問題はヤツにもあるんだけど、それ以上に・・・

「あら龍くん、昨日は失敗しちゃったのねえ？」

と部室にニコヤカに入ってきた隼人の姉さんが一番の問題な訳でして、ええ。

「みーちゃん・・・、やっぱ計画に無理があつたんじゃないかとおも　グウツ!？」

メリメリ、と良い音を僕のこめかみが奏でる。オヤおかしいな、いづからコメカミつてのは音が出るようになったんだ、と冗談が口をつかない程の威力のみーちゃん伝家の宝刀アイアンクローが炸裂した。

「み、みーちゃ・・・、ミ、ミス青陵がアイアンクローなんかしちゃ、い、いけな、グオアア！」

「あら、龍くんって本当にお世辞が上手いんだから。お姉ちゃん照れちゃうな。」

「て、照れてるようには思えな、ピギイイイ！」
「い、いたいよ！マジデタイヨ！」

「やだな、龍くん。そんな豚の真似なんかしてお姉ちゃんを喜ばせようとしてくれなくなつて、お姉ちゃんは龍くんと一緒に居られるだけでとっても幸せだよ？」

「ウ、ウソダ、ギャアアアア！」

頭蓋骨まで砕けてしまえと言わんばかりの恐ろしい握力を惜しみなく披露してくれる山中美春こと「みーちゃん」。昨年、僕らが入学する前の学園祭で行われる『ミス青陵』において一年生ながらも堂々の一位を勝ち取り、成績においてもトップを独走する才色兼備の2年生。

噂では一日につきみーちゃんにアタックをかける男の数は5人を下回った事が無いとされ、おいそれもう全校生徒足しても足りてねえよみたいなツツコミも信憑性を揺るがせない程の人気を誇る、いわゆる全校生徒の憧れの的だ。

確かにまあその見てくれやステータスだけを見れば、僕だってみーちゃんがモデルのも頷ける。

少し切れ長な目に見つめられると思わず見惚れてしまうのは、まあ否定できないし、時々長い髪をかき上げる仕草なんかは異常に色っ

ばい。どこが、と明確に言及するのは避けるとしても破壊力のある体つきも直視に耐えない（誤用）。

およそ美人としての条件をほぼ完璧に網羅しているんじゃないかと思われるみーちゃんであったが、外面と反比例するように隼人や僕に対しては傲岸不遜、天上天下唯一独尊、お前の物は私の物私の物は言わずもがな私の物、ワンと鳴いて三回回って私の靴をおなめなさい、という傍若無人な態度に終始している。

それで、なにを考えたのか分からないけど、全校生徒の注目的であるみーちゃんは今年、隼人や僕が入学すると同時に、今までのありとあらゆる部活の勧誘を断り続けていた態度を一変させ、青陵学園では数年前から存在を消していた新聞部を復活させた挙句、隼人と僕を強制的に入部させた。

なんでいきなり新聞部なのかはよく知らないが、一度不思議に思っ
て尋ねたときに悪魔のように唇を吊り上げて見つめてきたので一目散に逃げ出して以来謎に包まれている。

しかしまあ取り立てて取り柄も無かった僕としては、心置きなく接する事ができる隼人やみーちゃんと部活動をする事に抵抗は無かったんだけど、よりによって隼人が逃げやがった。くそうあの野郎。青陵学園では部活の掛け持ちも特に禁止はされていないのはい事に、空手部へ浮気していつこうに新聞部へ顔を出さないのだ。

僕らの友情はそんなもんだったのかい！？と詰め寄ったものの「俺はあの姉貴と1時間以上同じ空間で過ごすと犬に変身してしまう呪いに掛かっているのだ。あいつは悪魔なんだ。サタンだ、サキユバスだ、ベルゼバブだ。気をつける龍二。お前も、死ぬぞ。」と真面目な顔をしてのたまうものだから、しっかりみーちゃんに情報をながしてやった。翌日隼人が入院したというニュースがまことしやかにクラスを駆け巡ったのは何でだろう、不思議でしようがないぜ。それでまあ不本意ながら（周りの男どもには羨ましがられているが）みーちゃんと二人きりの部活動に従事する事になった僕は、日夜スクープを求めて校内を駆け回る事になった。

しかしまあ平和がモットーなんじゃねえの？と疑問に思うような学園内においておいそれと事件など起こりようがあるはずもなく、紙面が埋まらない事を嘆くデスクことみーちゃんに「龍二、スクープを作ってきなさい。」と犯罪命令を受け実行する事とあいなったのである。

「む、むりだよ、グギギ、や、やりすぎだと思っつていったじゃな、グゲゲゲ。」

「あら、計画は完璧だったわ。本当だったら今日の学園の話題は深夜に校舎内で花火を打ち上げたお馬鹿な犯人の事で盛り上がったいたはずだもの。それを一面記事として取材する新聞部。ミス青陵の発行する新聞として注目の的だった青陵学園新聞の評価は右肩上がりで皆が我先にと掲示板へ殺到するわ。」

「む、むちやある・・・プギギギギッ！」

「そして回を追う毎に真相へと迫っていく新聞記事、高まる緊張感、手に汗握る展開に皆は固唾を呑んで文字を追うの。」

「し、真相に迫ったらば、ぼくが・・・アガガガガガ！」

「そして・・・遂に真犯人が浮かび上がるのよっ！」

「僕を売る気満々じゃないかつ！」

駄目だ！この人駄目な人だ！目が、目が陶醉している！

「私は謝罪会見を開くの。私が、私がしっかりとしていなかったのが悪かったんです。心の優しい子だと、・・・思っていたのに。こんな、こんな事になるなんて・・・。」

「それがやりたいだけだなっ！わかったぞ！あんた僕をダシにして遊びたいだけなんだなっ！絶対そうだなっ！」

「・・・今更？」

「何故そこで哀れむような目を！？」

くそう！！この人駄目だ！僕の事を完全におもちゃとしてしか認識していない！良いのか！良いのか安藤龍二！人として生まれ、龍のようにたくましく育って欲しいと親に願われて生きてきた龍二よ！こ

のままみーちゃんのおもちや（飽きて捨てられるタイプ）として花の高校生活を終えてしまっても良いのか！？いや！よくない！打ち消し分的な感覚でもってして宜しくないぜ！なんとか・・・なんとかこの人をギャフンといわせ

「ギャフン」

「僕の心を読むんじゃねえ！」

みーちゃんがアイアンクローをやめて不敵に微笑む。グムウ、ずきずきするぜ。正直脳に多大な影響を与えている可能性が高い。帰りにCTをとっていかねければいけない。今すぐにも近場の脳外科に電話を

「林脳外科に6時から予約をとっておいたわ。」

「僕の行動を読むんじゃねえ！」

フフン、とみーちゃんは鼻で笑って、安物のパイプ椅子に腰掛けている僕の背後に回りこんでくる。スカートの裾のひらめきに目がいってしまふのは生物としての本能だ。決して、この人を女として認識してはいけない。命に関わる。

「龍くんの考えている事ぐらい、なーんでもわかるけどね？」

「へ？」

フワリ、と音のしそうな柔らかな動きで、みーちゃんが僕に後ろから抱きついてきた。

・・・He?

「今回は、失敗しちゃったから。」

みーちゃんの、なんつーか柔らかいものが背中にあたる。

「たっつぷり。」

甘い香りが鼻腔に満ちて、なんかムズムズする。

「もう二度と。」

耳にあたる息がくすぐつたい。

「忘れられないくらい。」

頭の中がみーちゃん一杯になる。

「おしおきしてあげなくちゃね。」

絶望した。

「ぶががががががああああああ！！！！！！！！！！」

みーちゃんの的確なチョークスリーパーが僕の首に炸裂した。

おしおきって、アイアンクローで十分じゃないの？と雲の上で神様がさめざめと涙を流す姿が見える。

神様がお節介を焼いて天使を派遣して僕をお迎えにこない事を切に望む。

まだ初チューすらしたことねえ。

来るなよ！絶対に来るなよ！？

「・・・あんたたち、何してんの？」

そうして全校男子生徒と一部女子からも恨みをかいそうなシチュエーションでみーちゃんにもみくちやにされていたまさにそのとき、ガラツと開いた部室の扉。

涙腺が崩壊してにじむ視界の隅に映ったのは、幸いな事に神様に派遣された僕を哀れみ涙する天使ではなく、不幸な事にもう一人の幼馴染、羽賀夏樹、その人であった。

勘弁してくれ！！！！！！

神様！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516j/>

私立青陵学園新聞部

2011年1月28日05時39分発行